

学校経営のポイント

高校野球に感動，政治は激動

若井 彌一

少々タイムラグのある内容をお届けすることをお許しいただきたい。今回お届けする内容は、1つが全国高等学校野球選手権大会の決勝戦のこと、もう1つが衆議院議員総選挙の結果についてである。

歴史に残るドラマティックな決勝戦

夏の甲子園，今大会の決勝戦（8月24日），中京大学附属中京高等学校対日本文理高等学校の試合は、これまでの数ある決勝戦のうちでも、きわめてドラマ性に富んでいた。

とはいっても、8回終了時点までは10対4のスコアが物語っているように、中京高等学校（愛知県代表）のワンサイドゲームの感じが強かった。

ところが、9回表、日本文理高等学校（新潟県代表）が、まさかと思われるような2死ランナーなしの状態から、じつに「怒濤の猛反撃」が始まったのである。日本文理高等学校を応援している人々にしてみれば、「誰もが奇跡を信じた19分間」であったと思われる（週刊ベースボール・別冊秋季号『日本文理準優勝記念特別号』ベースボールマガジン社、平成21年9月10日発行）

10：9のスコアで、決着はついた。しかし、最後の打者も三振ではなく、サード強襲のライナーであり、野球を楽しむ人々にしてみれば、こんなに盛り上がった決勝戦は、個々の主観の差はあっても、おそらく希少な例であったはずである。

この試合は、夏の大会で成績が芳しくなかった「新潟県」のイメージを一変させるほどの効果を発揮したに違いない。優勝に輝いた中京高等学校と日本文理高等学校の両チームの活躍に対して、心から賛辞を贈るとともに、今後のいっそうの錬磨を期待したい。

今回は、もう1つの話題も取り上げておこなくて

はと思う。

政権交代，民主党の今後に注目する

8月30日に実施された衆議院議員総選挙の結果、民主党所属・推薦議員が圧勝し、同党が訴えかけてきた「政権交代」が実現したことである。

具体的な個々の政策について、国民が詳細に及んで理解したうえで民主党に投票した、とは必ずしも言えないように思われることから、今後の政策の展開の仕方いかんによっては、比較的短期間に支持率が低下していくことも予想される。

今回の選挙では、「政権交代」と財源をどこに求めるか、という具体的な詰めが残されているものの、小泉 安倍 福田 麻生と続いた自民党政権（正確には、公明党との連立政権）の成果に対する不満と今後への見通し不安から、民主党候補者あるいは民主党そのものに、なにほどこかの期待を込めて投票した人が多かったと推認される。選挙結果は「劇的な圧勝」ではあるが、今後、さらに国民の強い支持を取りつけていくことができるかどうかは、国民を納得させるに足る説明力に富んだ政策をどれだけ実現に移していけるか、にかかっている。

民主党は、マニフェストのなかで、教育政策については、「年額31万2,000円の『子ども手当』の創設」「公立高校を実質無償化」「私立高校生の学費負担の軽減」「すべての人に質の高い教育を提供」等を掲げている。6年制の教員養成、教員免許制度の見直し等についても方向性を打ち出している。

これらが今後、具体的にどのように深まりのある政策論として展開されることになるか、期待をもって注目し、教育界として要望や意見を出していきたいものである。

（わかい・やいち = 上越教育大学長）

●最新刊好評発売中！

浅野良一【編】 A5判 204頁・定価 2,415円 教育開発研究所

『学校におけるOJTの効果的な進め方』

『スーパー教職大学院発進！』 A5判280頁・定価 2,520円